

令和7年度 奈良市立都南保育園 研究実践概要

園長名 堅尾 清子
全園児数 43名

1. 研究主題 『やってみよう、おもしろい、もっとやってみよう』
と思える環境づくりをめざして

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

子ども達は、園庭や室内で好きな遊びやしたい遊びを見つけて楽しむ姿があるが、すぐに飽き、保育者が一緒にないと遊びが続かないという姿が課題である。昨年度の研究を進める中で子ども達が落ち着ける環境づくりをまず作り、そこから子ども達が自ら『やってみよう、おもしろい、もっとやってみよう』と感じる環境を構成していくことが大切ではないかと考えこの主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

・豊かな環境の中で『やってみよう、おもしろい、もっとやってみよう』と主体的・意欲的に遊ぶ子どもを育てる。

②研究の重点

・0歳児から5歳児までの発達を理解し、乳幼児期へのつながりのある保育をすすめる。
・職員間で連携をとりながら、子どもが主体的・意欲的に活動できる環境や援助のあり方を工夫する。

③活動の方法

年度初めに、各クラスの子どもの姿や課題を出し合い今年度の研究主題について話し合った。学期ごとに環境について話し合う会議を数回設定し、子どもの遊ぶ姿から、園庭環境や保育室環境について見直し、主体的・意欲的に遊ぶことが出来るよう再構成したり、子どもの心の動きを職員間で話し合ったりしながら振り返る場を持った。

0歳児「ばあって楽しいなあ」(11月)

ダンボールをつなげた長いトンネルの手作り玩具を設置した。A児(17か月)は長いトンネルをのぞきながら不思議な表情をして中に入っていた。B児(10か月)はトンネルの外側を持っている。A児とB児の目が合いお互い微笑んでいた。B児は体制を変えてトンネルに入っていた。前に進んでいるうちに先に進んでいたA児が後ろ向きになりつかまり立ちをして「ばあ」と顔を出す。B児も手前でつかまり立ちをして「ばあ」と顔を出して2人で笑い合っている。A児とB児が顔を合わせて「キャッキヤ」と言っている姿を見ていたC児(12か月)もトンネルの中に入っていた。A児とB児が立っている近くま



でC児も進み、つかまり立ちをして同じように「ばあ」と言葉を発して遊んでいた。

<考察>

「いないいないばあ」の絵本が好きだったり、保育者がハイハイで追いかけて「ばあ」と顔を見合わせると声を出して喜ぶ姿があったりしたこと、もっと子ども達が意欲的に遊ぶ姿につながればと思いトンネルの手作り玩具を設置した。子ども達はA児が遊び出したことをきっかけに何度も「ばあ」と顔を見合わせる遊びを楽しんでいた。短いトンネルではなくいくつもダンボールをつなげた事で「何があるんだろう？」という好奇心と「入ってみたい」という意欲の気持ちを引き出すことが出来たように思う。また、友達と同じ空間の中で一緒に遊びを楽しむ姿につながった。

1歳児「大きいドングリ」(10月)



秋になり園庭にたくさんドングリが落ちているのでドングリ転がしを楽しめたらと思い転がしのコースとドングリを入れたかごを設置した。A児は数日前から転がしのコースに興味を持っていて、この日もかごからドングリを1つ取り、ペットボトルのコースに置いて転がる様子を見て楽しんでいた。コースの途中でドングリが止まると、ペットボトルをたたいて転がそうとする姿もあった。思っていたところと違う所からドングリが落ちてくると「あっ」と声を上げ驚いた表情も見せていた。A児は転がすのをやめ、かごに入っているドングリを触り始めた。

そこへB児がやってきた。A児はB児にかごに入ったドングリを指差しながら「おおきいドングリ」「ちいさいドングリ」と伝えていた。B児も「おおきいドングリ！」と手にとりながらA児に見せている。ドングリの入ったかごに虫が入っていた。A児が「むしー」とB児に伝えながら笑いあっていた。

<考察>

毎日同じ場所に転がしコースを設置することで子ども達はこの場所にくれば転がし遊びが楽しめると思ってくれていたと考える。その中でA児が転がし遊びをいつものように楽しんでいるとB児がやってきて2人のやりとりにつながった。ものの名前を覚え始め、友達に伝えたいというA児の思いがあり、B児もA児の言葉を受けて大きいドングリを探し、見つけて2人でやりとりを楽しむことが出来た。



2歳児「うわー！おおきいね」(10月)



春から虫が好きな子ども達。5歳児が虫めがねを使っている姿を見て虫めがねに興味を持ったA児が虫めがねを手にとり、のぞいて見た。「うわー」と驚き、保育者に「おおきくなってる！」と驚いた表情で伝えてきた。その様子を見ていた他の子も近づいてきて、みんなで木の葉や虫、ドングリ、石ころなどいろいろな物を虫めがねで見ている。「おおきくなった！！」という子や大きく見えるのが「こわい」子もいてそれぞれに感じたことを口々に言う。虫めがねを目にあてて(近すぎて)「みえない～」という子もいたが保育者が手を添えて一緒に見ると見ることが出来て「おおきいね」と喜んでた。「足見える」「口ある」などみんなで嬉しそうに話をしていた。

春から虫が好きな子ども達。5歳児が虫めがねを使っている姿を見て虫めがねに興味を持ったA児が虫めがねを手にとり、のぞいて見た。「うわー」と驚き、保育者に「おおきくなってる！」と驚いた表情で伝えてきた。その様子を見ていた他の子も近づいてきて、みんなで木の葉や虫、ドングリ、石ころなどいろいろな物を虫めがねで見ている。「おおきくなった！！」という子や大きく見えるのが「こわい」子もいてそれぞれに感じたことを口々に言う。虫めがねを目にあてて(近すぎて)「みえない～」という子もいたが保育者が手を添えて一緒に見ると見ることが出来て「おおきいね」と喜んでた。「足見える」「口ある」などみんなで嬉しそうに話をしていた。

<評価・反省>

5歳児の虫めがねを使う姿を見て「自分もやってみたい」という子どもの興味が芽生え、実際に手にとり、真似て使ったことで「物が大きく見える」という体験をした。虫めがねで見た景色は子ども達にとって驚きの連続で楽しい時間を過ごすことが出来た。子ども達が興味を持ったことをすぐに試すことが出来るよう環境を整え、友達と関わって遊ぶ経験をこれからも重ねていきたい。



3歳児「カーンカーンっていくかな」(11月)



波板や板を使って転がし遊びを楽しんでいた。1つずつ転がしたり両手に握って転がしたり、バケツや鍋からジャーっと一度にたくさん転がしたりしながら繰り返し遊んでいた。A児が側に落ちていた型抜きやカップを板の上に乗せた。ドングリを左右に動かし「あ、そうや！」と何か思いついた表情をし、「カーンカーンっていくかな？」と話した。部屋にあるドングリ転がしをイメージしていることが分かり、「いいね！カーンカーンってなるんじゃない？やってみる？」と保育者が言うと、砂場から型抜きを数個重ねて運んできて板の上に並べた。A児なりにイメージして互い違いにパチンコのように型抜きを置き、ドングリを転がしたが、カップに当たらずまっすぐ転がっていった。首をかしげてもう一度転がしたが、またまっすぐ転がっていった。それを見ていたB児が砂場に型抜きを取りに行き板に並べた。A児も砂場に型抜きを取りに行き、板の上にたくさんの型抜きを並べた。A児がドングリを転がしてみると少し型抜きに当たった後下に落ちA児はニヤッと笑った。その後もドングリがまっすぐ落ちたり、ジグザグに落ちたり、止まったりする様子を見ながら、A児B児2人で繰り返し遊ぶ姿につながった。

<考察>

春からペットボトルの蓋で転がし遊びをしていた経験が今回の遊びにつながったと考えられる。A児がやってみたい気持ちを保育者に伝え、保育者が共感したことでやりたい気持ちが高まり自ら遊ぶ姿につながった。また、友達がしていることに興味を持ち、同じようにやってみたいという気持ちが芽生える時期なのでA児とB児が関わる姿につながった。これからも子ども達の思いを汲み取りながら楽しい経験を積み重ねていきたい。



4歳児「忍者修行『〇〇の術』」(10月)



忍者の絵本をきっかけに忍者修行が始まった。絵本に出てくる術を真似ることから始まり、さらに興味をもって欲しい思いから、忍び足で歩いたり、走ったり、ジャンプしたり、忍者になる踊りも楽しんできた。ある日、園庭で鉄棒をしていたA児。「せんせい見て！前回りの術！」と嬉しそうに見せてくれた。その様子を見ていたB児は両手両足をひっかけて「おさるの術」と言ってみせてくれた。そんな2人の姿から園庭のサーキット遊びに鉄棒を取り入れた。そこから鉄棒修行が始まり、「こうもりの術」



「スパイダーマンの術」と自分達で名前をつけて繰り返し挑戦する姿へとつながった。

<考察>



忍者に興味を持ち、いろいろな修行を楽しんできたことで子ども達は鉄棒も忍者の術につながっていると感じた。友達の姿を見てやってみたい気持ちを持ち、繰り返し挑戦することで出来た喜びや自信となっている。子どものつぶやきを見逃さず、遊びに取り入れ、意欲や主体性につながるようにしていきたい。



5歳児「きをつけてわたらなあかんで」(12月)

朝の園庭のサーキット遊びを5歳児で考えて組むことにした。始めは今までしたことがあるコースを真似ていたがサーキットの道具が置いてある場所をじっくり見てから「きょうはとんねるいっばいの『くぐりっこコース』をつくりたい」「はしごとへいきんだいで『にんじゃしゅぎょうコース』にするわ」等どんどん自分達で考えたコースを作るようになった。自分達で考えたコースを3,4歳児が挑戦し始めると「がんばって!きをつけてわたらなあかんで」と応援したり、危険が少なくなるよう挑戦したりする様子も見られた。自分達で作ったコースを楽しんでくれていることが嬉しく明日も3,4歳児を楽しませたいという姿も出てくるようになった。



<考察>

サーキット遊びは「作ってあるものをする」から「自分達で作れる」と知り、何回もコースを作ることで今まで使っていなかったコーンや板、マット類もコースを作る道具になっていった。サーキット作りをする中でアイデアを出し合ったり、話し合ったりする機会が増え、共通のイメージを持って活動を進める経験につながった。



5. 研究の成果

今年度は環境づくりに重きを置き研究を重ねてきた。部屋の環境を春にみんなで話し合うことで各部屋の工夫を学び、見直しをすることが出来た。その結果、昨年度より各部屋の環境を充実することが出来たと感じている。また、写真を使ったエピソード会議を定期的に行うことで各クラスの子どもの様子や保育のつながり、担任の思いを共有することが出来た。語り合うことで多角的に子どもの姿を見取ることが出来たので保育者の子どもを見る視点が広がったと感じている。また、アドバイスをし合うことで保育が広がり、悩みを解消することにもつながった。

6. 今後の課題

- ・意欲的に遊ぶ姿は育っているが遊びが続かない姿がある。遊びを連続的にとらえる視点を保育者が高め、環境構成の工夫や援助の在り方を追求していきたい。
- ・子ども達の心の動きを丁寧に見取り、子ども理解を深めることが環境づくりにつながっていくと考える。会議の内容も再度見直し、遊びの見守り方や保育者の関わり方を保育者一人一人が深く学ぶ環境を作っていきたい。